


<p>第210回 都市懇サロン レポート</p>	<p>「まちの価値を高めるための新たな公共空間利活用方策の試み」</p>		
<p>講師</p>	<p>株式会社日建設計総合研究所 （社）都市計画コンサルタント協会理事 （公社）日本都市計画学会理事 西尾 京介 氏</p>	<p>開催日</p>	<p>平成 29 年 4 月 18 日 (火) 18 : 00 ~ 20 : 00</p>
<p>講師 プロフィール</p>	<p>1992 年、株式会社日建設計入社後、大規模都市開発の計画、都市のビジョン・戦略策定や都市計画、都市交通計画、再開発等の各種調査・計画業務に従事。2006 年、都市、環境のコンサルティングを行う日建設計総合研究所の設立に伴い、現職。中心市街地の活性化やまちなか再生に関する、国や自治体等の調査、企画、コンサルティングを手がける。</p>	 <p>サロンの様子</p>	
<p>お話の概要</p>	<p>【松山市大街道商店街におけるプレイスメイキング実証実験について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ねらい：公共空間を改善し、商店街に人を滞留させる。 ◆テーマ：商店街に市民のリビング（誰でもくつろげる公共空間）を創る。 ◆主な実験内容 <ol style="list-style-type: none"> ①「座り場」の設置（日建設計総合研究所の自主研究事業） 約 100 ㎡の空間にイス、テーブル、植栽、照明等を配置し、公共スペースとして市民に一般公開。使用目的について基本的に制限をかけない。 ②「KAEBON」プロジェクト（松山市 第 2 回大街道街なか空間活用実験より） 本棚、イス、テーブル、植栽、照明等を設置し、交換型図書館として市民に一般公開。本棚に置いてある本は、利用者が所有する本と交換が可能。 ◆実験によって得られたこと <ul style="list-style-type: none"> ・市民にとって商店街は通行スペースという認識でしかなかったが、実験によって「くつろげる空間」という認識を与えることができた。 ・商店街の中で休憩することで、周りの店舗に目が届くようになり、利用者の購買意欲向上、店舗の売上向上に繋がった。（座ること・休憩することができるから、何かを食べたくなるという感覚によるもの） ・商店街店舗のパブリックマインドを喚起させることができた。（公共空間改善の重要性に気づきを与えることができた） ◆良好なパブリック空間をつくるための原則 <ul style="list-style-type: none"> ・誰にでも開かれている空間であること ・居心地が良いこと（視覚的に休憩スペースであることが認識できること、通行者から見て座り場の利用者が目立たないこと） ・安心感があること（空間や備品が管理されていることが視覚的にわかること） 		
<p>意見交換の概要</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○商店街の将来の担い手である若い世代に対して、どのようにパブリックマインドを喚起させていくかが今後の課題となる。 ○商店街組合のお金の使い方については工夫の余地があると思う。現在は販促関連の取り組みに重きを置いているが、公共スペースの改善にもっと比重を置き、人を滞留させることで、店舗の売上に繋げるという考え方も必要だと思う。 ○店舗の位置によっては利害関係（売上額の格差など）が生まれてしまうと思うが、どのような反応があったか。 ⇒結果的には概ね好評を得たが、中には苦情を出す店舗もあった。 		
<p>記録者のひとこと</p>	<p>「座り場」は、大街道商店街には目に見えた大きな変化を与えつつも、その利用者自体は目立たせないよう、空間デザインには工夫が施してある。植栽によって周辺からの視線を遮る工夫については、植栽の数が多すぎると閉塞感があり、気軽に利用しにくい環境になってしまうが、逆に少なすぎても利用者の居心地が良くないと思う。こうした色々なバランスを考慮した空間デザインを行っていることが興味深いところであった。 <p style="text-align: right;">《都市懇サロン運営部会 委員 安 政翔》</p> </p>		